

「ご帰還」もなく、修復終え、間もなく「ご帰還」 政宗公騎馬像 修復終え、間もなく「ご帰還」

伊達政宗公騎馬像帰還記念企画
おかえりなさい、**政宗公**
「伊達の気概」ここにあり

特集 第1回

伊達政宗公騎馬像の歴史をたどる

仙台：宮城の象徴 現騎馬像は2代目

甲府騎馬像で穏やかに城下を見守る伊達政宗公騎馬像は、全国的にも知られる仙台・宮城の象徴だ。しかし、この像が実は2代目であることを知る人は多くないかもしれない。現在修復中の騎馬像がこの地に据えられたのは、1964年10月9日の東京五輪開会式前日。初代は、その日から20年前の35年5月23日に建立された。

初代騎馬像は、伊達政宗公（1567-1636年）の没後300年を記念する事業の一つとして建立された。33年、政財官の人材が集まって「藩祖伊達政宗公三百年祭協賛会」を設立し、三百年祭に向けてさまざまな記念事業を計画。その一つが「政宗公の銅像を建立しよう」という動きがあったことだ。発案したのは宮城の若者たち。協賛会発足前の30年、宮城県連合青年団が建立に向けて既に活動を始めていた。協賛会設立後は、青年団と協賛会が協働しながら実現を目指すことになった。

郷土史研究家の佐々木伸さん（88）は「仙台市は、騎馬像を作ったのは協賛会と思われがちですが、青年団が発案し、自主的に動いて建立したのです」と語る。政宗公の銅像建立は、団員たちが労働奉仕で得た資金と、旧仙台藩の家々を一軒ずつ訪ねて募った寄付金で成し遂げた完全な民間主導型の事業だった。



郷土史研究家 佐々木伸さん
金で成し遂げた完全な民間主導型の事業だった

彫刻家小室達制作 治道20万人が歓迎

銅像の形がなぜ騎馬像になったのか、詳しい経緯は明らかになっていないが、33年、青年団が議論を重ねた結果、「制作者は小室達」「銅像の形は37歳の政宗公が仙台城に入城する甲府騎馬の姿」を建立場所には仙台城丸の招魂社境内」と決定したと伝えられている。

制作を依頼された小室は、槻木村（現宮城県栗原市）出身で、東京美術学校（現東京芸術大学）を首席で卒業した気鋭の彫刻家だった。「はたの郷土館」学芸員の岡山卓矢さん（37）は「各方面から寄せられる多くの助言も、苦言に一言一憂しながらも、素直に受け入れて試作を進めていったよ」と説明する。

35年1月20日、2年の歳月をかけた石像が完成し、東京・日暮里の伊藤精造所で鋳造された。高さ約4.2m、重さ4.5tの「伊達政宗公騎馬像」の完成だ。騎馬像は5月12日深夜、大型トラックに引かれ、仙台に向けて出発する。随行したのは、青年団。移送中、彼らは木道の橋や悪路といった困難に遭遇するたびに、仮設の橋を架けたり



青年団が随行し輸送された初代騎馬像（写真提供：斎孝子氏）

戦時下に金属供出 「胸がさける思い」

初代騎馬像は9年後、仙台城跡を離れることになる。太平洋戦争下の金属供出だ。44年1月22日、「藩祖公出陣」の目玉で、出陣式まで行われた。招待された小室は「胸がさける思いだった」と日記に記している。その騎馬像が、戦後の45年11月、塩釜市の金属回収所で発見された。回収所職員が「政宗公は溶かせない」と手を付けるのが遅れていたのかもしれない。発見した郷土史家の石川謙吾は、「仙台に居たい」と、全て溶かされる前に個人で買い取ることを決意する。かろうじて残った胸像は後に仙台市に寄贈された。78年からは仙台市博物館に展示されている。



初代騎馬像は現在、仙台市博物館南庭に展示されている。戦後、塩釜の金属回収所で発見された。



政宗公騎馬像の降り立つ仙台城跡（手前）と仙台市街地。フェンスで囲われた台座（右下）に間もなく騎馬像が戻る



×=石垣修復のため現在通行止

「伊達政宗公騎馬像」の歩み

1930年(昭和5年)	●政宗公銅像「発見(宮城県青年団)
1933年(昭和8年)	●藩祖公三百年祭協賛会設立 ●「伊達政宗公騎馬像」制作を彫刻家・小室達に依頼
1935年(昭和10年)	●「伊達政宗公三百年祭」 ●「伊達政宗公騎馬像」(初代)建立
1944年(昭和19年)	●「伊達政宗公騎馬像」出陣式(金属回収所により)
1945年(昭和20年)	●郷土史家・石川謙吾が騎馬像を発見(塩釜の金属回収所)
1953年(昭和28年)	●小室達死去 ●伊達政宗公立像(平和像)建立
1954年(昭和29年)	●小室家が騎馬像石膏原型を槻木町に寄贈
1963年(昭和38年)	●「伊達政宗公騎馬像」の復元を仙台市観光協会が決定
1964年(昭和39年)	●伊達政宗公立像(平和像)、岩出山城跡へ移設 ●「伊達政宗公騎馬像」(2代目)復元・建立
2022年(令和4年)	●地震により「伊達政宗公騎馬像」の一部破断、修復へ
2023年(令和5年)	●「伊達政宗公騎馬像」帰還・再開(予定)

損傷、市民に衝撃 郷土の誇り再認識

昨年3月16日、宮城県などで起きた最大規模の地震。「馬の足音が破断し、騎馬像が傾く」というニュースは、仙台市民に衝撃を与え、政宗公騎馬像が「郷土の誇り」であること、意義を再認識させる結果となった。佐々木さんは「騎馬像、台座、銘板という三つの要素の中でも、仙台藩出身の斎藤美元首相が揮毫した銘板に注目してほしい」と語る。刻まれ

騎馬像が供出された日から、仙台城跡の台座は空のままであった。この空白の時代に、終止符が打たれたのは、53年10月。小野田セメントが白セメント製の「伊達政宗公騎馬像(2代目)」を寄贈したのだ。その後、騎馬像の石膏原型が小室の遺族より故郷、槻木町(当時)に寄贈される。これが、2代目騎馬像建立の伏線となった。

やがて、仙台市民の間で政宗公の騎馬像を懐かしむ声が上がった。そこには、騎馬像の石膏原型が槻木にあるという話が伝わったことだ。騎馬像復元への機運は高まった。時を同じくして、仙台市観光協会が社団法人化に向けて動き出し、記念事業として、騎馬像の復元が組み込まれることになった。

た「伊達政宗公」の「卿」の字は「従三位以上の高い官位」を示す。威厳と格式の高さを強調する敬称を使ったところに、建立した青年団の思いが込められている。佐々木さんは「小室が制作者には選ばれていないけれど、多くの人の心にある伊達政宗公のイメージは、もっと違ったものになっていったのではないかと聞かせる。今年は小室達没後70年にあたる。「はたの郷土館」では、騎馬像の帰還と小室達没後70年に合わせて、石膏原型を全て展示する企画展を計画している。

初代の建立から今日まで、さまざまな時代とともに仙台を見つめてきた「伊達政宗公騎馬像」。仙台の礎を築いた政宗公の気概を今に伝える騎馬像が、間もなく仙台城跡に帰ってくる。政宗公の功績に思いをはせながら、その日を待ちたい。



「はたの郷土館」学芸員 岡山卓矢氏



騎馬像 修復レポート 東京の修復業者が 昨年7月から修理 困難な作業 慎重、丁寧に

2005年7月、損傷した伊達政宗公騎馬像は、修復作業のため東京都瑞穂町の「ロンズスタジオ」に運び込まれた。彫刻修復を専門とする同社でも、今回の修復は困難なものだった。その理由の一つが「設計図が残っていない」こと。そのため内部の調査は慎重かつ丁寧に進められた。破断した左前脚と右後脚の足首部分から

馬の腰部を切り開いて調べたところ、芯棒が左前脚と右後脚の中を通り、地山像と台座をつなぐ部分に固定され像を支えていることが分かった。芯棒は鉄製で腐食が進み、地金部分が劣化が見られた。破断の原因は地震に加え経年劣化もあったものと推察される。

丹念な作業に驚き 「頭の下がる思い」 騎馬像は修復の原型をもとに鋳造により制作され、

作業がうかがえて頭の下がる思いだと当時の職人たちの仕事ぶりに敬意を表す。

修復作業では、腐食した鉄製の芯棒をステンレス製に換えて強度を上げ、左後脚のつま先部分にステンレスのねじで地山に固定。像の肌は従来の印象を損ねないよう汚れを取り除く。高橋さんは「美術品であることも、仙台・宮城のシンボル、ランドマークとして大切さを兼ねている点に、一般的な文化財との違いを感じる。初代像が戦時の金属供出で一度姿を消したことで、東日本大震災に耐えたことなど、歴史性を加味しつつ、設置するまで丁寧に仕事を続けた」と語る。

騎馬像が本丸広場に再び戻るのには、木江美子課長は「市民の皆さまから、騎馬像が無いと寂しい」「戻るとか、なにかの音が聞こえてきた」と感じる。修復を終え、仙台城跡にまた戻ると、楽しみに待っていたかのように呼び掛けている。

投稿テーマ
① 政宗公と騎馬像へのメッセージ
② もしも、現代に政宗公がいたら...

投稿募集

政宗公騎馬像の帰還を前に、この企画の一環として、伊達政宗公と政宗公騎馬像にまつわる投稿を募集しています。騎馬像の帰還を、ともに盛り上げましょう！

3月12日(日) 23:59迄

メッセージ、続々と寄せられています。今すぐ投稿を！投稿は特設サイトから

○紙面特集 第2回(河北新報別刷).....3月下旬 発行予定
○トークイベント.....4月中旬 開催予定
○紙面特集 第3回(河北新報朝刊).....5月下旬 掲載予定

お問い合わせ/河北新報社営業局業務推進部 TEL:022-211-1314(土日祝を除く10~17時)